

教育の役割を「現代」という時代の中で模索するⅡ

前回の Ed.ベンだよりでは、「教育の役割を『現代』という時代の中で模索する」というテーマのもとに、日本の戦後教育が、高度経済成長そして低成長の時代へと移り、国際的な競争力が求められる現代に至る中で、学校教育も大きく変化してきたことに触れました。教育委員の公選制から任命制へ、教科書検定の実施などを進めるなか、主任制度を代表とする学校の縦組織化と、研修や教職員評価制度による教員の平準化が進められてきたことにも触れました。つまりは、「経済界主導の学力競争」は、「将来損しないように今頑張る」場所が学校なのだと言いつけてきたわけです。そうした一方で進んできた世界的な状況としては、自国拡張主義、軍事産業の肥大化、資本主義経済の行き詰まりの三つをあげました。そして、「誰が生き残るのか」といった生き残りをかけた戦いを教育が求めるのではなく、公教育として、「分け合いながらも、皆で笑って生きる」教育へ転換しなければ、それこそ未来が見えてこないのではないだろうか、と問題提起もしました。この間にも、イスラエルとイランの戦争に突如アメリカが加わったりと、まさしく今回提起している問題の延長線上の出来事が実際に目の前で起きつつあります。

「現代」という時代の中で教育の役割を模索することはたやすいことではありません。でも、今だからこそ私たちが真剣に考え、すこしでも何かを見つけ出さないと、子どもたちの前で教育を語る視点すら我々は見失ってしまうのではないかと危惧するわけです。そうしたことから、学校の現状に沿いながら「教育の役割」をもう少し掘り下げてみたいと思います。

今回は「学校離れと格差の固定化」。そして今回は「平和教育」をテーマに考えてみたいと思っています。

つい先週のことです。定期試験も終わり、なんとなく夏休みムードが漂い始めた教室の片隅で中学校 3 年生の情緒学級の男の子二人と話していました。一人の子が突然私に問うたのが、「先生、『シンヨウ』って知ってる？」ということでした。『シンヨウ』？信用するってこと？と問い直す私にその子が話したのは、「違うよ。戦争の時の自爆用のボートだよ。爆弾積んで敵の船に体当たりするんだよ。」と言って、漢字まで教えてくれました。「震洋」と書くのだそうです。「自爆用の潜水艇の『回天』は有名じゃん？でも『海龍』っていうのもあったんだよ。」話が熱を帯びていきます。「だって棒の先に爆弾つけて、戦車に突っ込んでいく兵器もあったじゃん。」話を途中でさえぎって言いました。「ごめん、ごめん。先生は人が死ぬのは大っ嫌いだし、戦争はどんな戦争でも反対なんだ。だからその話にはなかなか付き合えないな。でもなんでそんな兵器に興味があるの？」ちょっと間があって、彼が答えます。



「俺、死にたいと思ったことがあるんだ。」「えっ、いつ頃？」
「小三のころ」「なぜ死にたいと思ったの？」「クラスの一人の奴からいじめられるようになって、そしたら調子に乗って周りの奴も一緒になっていじめてきた。死にたいと思ったけど、やっぱり死ねない。でも誰かを道連れにすれば死ねるかもしれないと思った。」「えっ、それってひょっとしたら今でも続いているの？」「そうだよ。」「先生に話せばいいじゃん。」「何度も話したけど、先生は向こうの味方。クラスのリーダーだからね。」同じ学級にいるもう一人の男の子にも尋ねました。「あなたもいじめられているの？」躊躇することなく「うん」と答えます。そしてまじめな表情になって別の話を切り出しました。「うちのお父さん、昨日入院しちゃった。急な下り坂で自転車で転倒したんだ。顔がえぐれて、頭にひびが入ったらしいの。」

子どもたちは日々様々なことに悩み、ぶつかり、心を痛めています。同じクラスのいじめられている二人が情緒級に在籍しています。いじめる側はクラスのリーダー！クラスの少し仲の良い子でも、その子の前では自分には冷たい態度をとるとも話してくれました。リーダーの上には先生！まさしく「縦の序列」と「疎外の論理」が出来上がっているようです。どんなに心を痛めても出口はありません。家庭での心配事も、伝える相手さえいないのかもしれないかもしれません。

中学校は荒れた時代を経験しています。1970 年～ 1980 年あたりがピークで、校内暴力によって先生が殴られる事件が頻発していました。学校が学校とは呼べないような状況が日々続いていましたが、そうした状況が急速に静かになると、集団の規律やまとまりを前面に押し出し、学校行事まで動員した「積極的集団づくり」が主流になり、子ども一人一人は個としての顔ではなく、一人の生徒としての行動を強く求められるようになりました。

こうした学校の動きに連動するかのように学力向上キャンペーンがはられ、全国学力学習状況調査までもがおこなわれるようになりました。単なるペーパーテストでしかないのですが、「学力こそが教育の成果だ」と錯覚してしまう時代が今も続いています。2027年からはこの調査もオンラインで行う方針を文科省は打ち出しています。全国の子どもたち一人一人の学力を文科省が把握できる、ということです。個の学力＝学校教育の成果という図式の中で、それでも子どもたちは学校に通うことを求められています。学習の成果が将来の生活設計につながる現実があるからでしょうか。

学校のこうした姿を冷静に見てみると、学校で生き残れる子どもと、離脱していく子どもに別れてしまうのは当然のように思います。文科省や経済界が求める「優秀な子ども」を選抜するための学校は、もう「すべての子どものための学校」ではなくなりつつあります。

子どもたちに必要な学力って、本当は何なのでしょう。すべての子どものための学校の姿とは、どのようなものなのでしょう。

怖いのは、いまの学校についていけない子どもたち（例えば不登校児童生徒）に対する居場所をつくることで、こうした問題に丁寧に対処しているように見せかけ、実は子ども自身の問題にすり替えることがはっきりし始めていることです。上で紹介した子どもたちのように、いじめられている子どもは「情緒級」におかれ、序列が固定化されるような仕組みになっているのです。その二人の3年生も、実は学力はそれほど低いわけではありませんし、情緒が不安定なわけでもありません。二人に聞きました。「ここで私と勉強しなくても、教室でみんなと一緒に授業を受けても充分についていけるんじゃないの？」という私の問いに、二人は口をそろえて言いました。「いやだ、みんなとやるより、ここでやったほうがいい」と。何ともやるせない応えが返ってきました。子どもを切り捨てる場所さえ学校内にはシステムとして確立し始めているのです。

この頃の流行言葉。「個別最適な学び」と「協働的な学び」。新しい視点を提示したかのように言われていますが、「個と集団」において学びが深まることは以前から自明の理です。しかし、「個別最適な学び」の裏には「できる子はどんどん先に。できない子はその子なりに無理をしないで。」という落とし穴があるように思いますし、「集団」ではなく「協働」という言葉をわざわざつかっていることから、ビジネスシーンすら想起されます。

学びを通して「個」が成長し、「集団」が成長していく。こんな考えはもうどこにもありません。まして「学び合い」が教室の姿として追求されることはないのかもしれませんが。

しかし、序列化した子どもたちの下に位置する者たちの声や、学校に來られない子どもたちのことばを真剣に受け止めることなしに、学校が再生することはできないと確信しているのですがいかがでしょうか……。

まして、保護者達も、「わが子への教育サービスの向上」を個々に学校に要求し始めている現在、状況はますます複雑になっています。こうした背景には、保護者の心配や不安（子どもの将来への心配。うちの子は学校で大事に扱われていないのではないかと不安。）が学校を「信用できない場所」にしてしまっているのではないのでしょうか。

この状況を簡単に変えることはできません。しかし、せめて現実をしっかりと見つめなおし、学校のあるべき姿を少しでも思い描くことが、すべての子どもたちへの、私たちの現在の義務のように思うのです。

これからのEd.ベンチャーの学習会

外国人の子ども理解のための学習会 事例研究会

●7月26日(土)13:30~15:30

●9月17日(水)19:00~21:00

外国人の子ども理解のための学習会

●8月4日(月)13:00~16:00@大和市シリウス612

映画上映会『はざまー母国のための場を探して』

(日本と出身国を往来する移民の子どもの社会統合を見据えた言語教育ー母語・公用語の補習

教育を地域の「多文化共生」の拠点にプロジェクト制作)

講演・対談: 朴基浩(ばくきほ)氏(映画監督)

清水睦美氏(日本女子大学教授)

スタディツアー

●8月21日(木)10:30~

川崎市子ども夢パーク・フリースペースえん

インクルーシブな社会を目指す学習会

●8月24日(日)13:40~15:30@大和市シリウス603

なぜインクルーシブな社会が実現できないのか、その背景を考える

理論学習会

●8月30日(土)13:45~15:45@大和市シリウス603

テーマ: 現代社会の分析を基に今子どもたちに伝えたいことはなにか

授業研究会

●8月30日(土)16:15~18:15@大和市シリウス603

テーマ: 若手教員と考える教室での教師と子どもたちとの関係



◆理事のひとこと◆ 狭くて殺風景な教室に多くの子どもが押し込められている。雰囲気にも乗れまいと、はしゃいだり、面白おかしく振る舞うことに神経を使う子どもたち。大切なのは狭い空間での立ち位置や集団内の地位で、自分のことで精一杯。関心は周りに対する優しさや社会で起きている問題などには向かわない。大人からの意思の疎通の試みは十分注意しながら進めないと、キレられて、伝えなかったことが何が何だかわからなくなる。40年間何をしてきたのかと思う。偉そうなことを言って、毎日忙しそうに過ごして、残したものは暑さに歯止めがなくなったことと争いで多くの人が亡くなり続ける毎日。教室では40年前に見たのと同じような光景。(MM)